●せいてん質問箱

浄土三部経は釈尊の説かれた教え？

●質問●

「浄土三部経」は釈尊の説かれた教えなのでしょうか？

□「仏説」ということ

「浄土三部経」とは、『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』『仏説阿弥陀経』のことをいいます。それぞれに「仏説」という言葉が付されていますが。これは釈尊が説かれた法であるということを意味します。このことについて、近代において提示された疑問がいわゆる「大乗非仏説論（大乗経典は釈尊の説かれた教えではないという主張）」です。もちろんこのことは「浄土三部経」についてのみいわれたことではなく、すべての大乗経典にあてはまる問題です。

□大乗非仏説論とは

そもそも、仏典の示す教えは非常に広く、多岐にわたっています。表面的には互いにまるで違ったことが書かれているように思えるものもあります。中国や日本の学僧は、どの経典こそが釈尊の教えの真髄なのかを問題にしてきましたが、それはいずれの経典も釈尊の説かれた教えであるということを前提にしているといえるでしょう。

ところが、近代になって文献学の分野で研究が進むにつれ、歴史的に見れば釈尊の教えをそのまま伝えているのは大乗経典ではなく、むしろそれまで重視されていなかった阿含経典ではないか、と考える人たちが出てきました。大乗経典は釈尊がお亡くなりになってかなり経ってから、具体的にいうと紀元前一世紀ぐらいからこの世に出てきたということがわかってきたからです。このことは、全ての経典は釈尊の説かれた教えがそのまま表されていると考え、中でも大乗経典こそがその真髄と思っていた人たちにとっては衝撃でした。当時の言葉でいう「仏陀金口の説法」が、自らの信じる大乗経典ではないということなのですから。

□阿含経典の性格

今では、大乗経典が釈尊滅後数百年を経て世に出てきたものであることは常識となっており、大乗経典が釈尊の口から説かれた教えをそのまま文字にしたものだと考える人は、おそらくほとんどいません。

では阿含経典が釈尊の教えそのものであるか、というと、そうともいえません。研究が進むにつれ、阿含経典の中にも後から付け加わった部分がさまざまにあることがわかってきたのです。また一方で、最も古いと思われる部分にも、今度は逆に、仏教以外の考え方と通じる部分などがあり、阿含経典こそ「仏陀金口の説法」であるとは、単純に結論づけられないことがわかってきます。

そもそも、経典が文字化されたものとして成立するまでは、少なくとも二百年ほどは暗唱によって保持され伝えられたのであって、そこには暗記されるための工夫もあり、阿含経典もまた、釈尊の説法がそのまま伝えられたものであるとはいえません。もちろん、それでもやはり、阿含経典が釈尊の説法を記録したものである、という性格が失われるものではなく、その点は大乗経典とは大いに性格が異なると思います。

□「仏説」とは何か

このように、阿含経典もまた単純に「仏陀金口の説法」といえないわけですから、「仏説」ということをどう考えるべきか、あるいは、大乗仏教はどのようにして成立してきたのか、ということが問題とされるようになります。そして、大乗経典をどのように考えるかということについては、釈尊の説法をそのまま記録したものではないが、そこにはまさしく仏の教えが示されてあり、仏の教えが説かれているということをもって「仏説」とする、というのが基本的な考え方となっています。

□在家者に対する説法

こうした考え方とは別に、阿含経典というものが、基本的に出家者に対する教えであるということを問題にする人もいます。もちろん、阿含経典の中には在家者に対する教えも若干は含まれていますが、出家者の僧院の中でまとめられ、編纂されたことは疑う余地がありません。しかし釈尊が在家者に対して説かれた教えの量はかなり多かったはずであり、そうした在家者に対する釈尊の説法は、その大部分が阿含経典には収録されなかったであろうというのです。そしてその教えの核となるものは、ずっと在家者の間で伝承されてきたに違いないと…。

在家者に説かれた教えが、在家者の間でだけ伝承されたと考えられるのは、釈尊が入滅された後、出家者がそれまでの遊行生活から主に僧院で生活するようになったことも関係しています。釈尊在世当時よりも、在家者との間に距離ができてしまったのです。そして時間の経過と共に、次第に出家者の間にもその教えが伝わっていき、長い時間を経て、大乗経典の核となっていったのではないかというのです。

□大乗経典の成立について

そう考えるとき、問題にしなければならないのは、大乗経典も対告衆（教えが説かれる相手）が出家の仏弟子であるということです。ご存じの通り、『阿弥陀経』も、「如是我聞一時仏在」という言葉で始まりますし、法が説かれる相手も舎利弗や阿難といった出家の仏弟子です。

しかし、浄土教という教えの内容から考えると、直接に舎利弗や阿難に説かれたとは考えにくいように思います。それなのに出家の仏弟子を相手に説かれているように示されているのは、その教えが出家集団の中で経典として編纂されるにあたり、それまでと同様の形式、つまり、仏弟子に対して説かれたように形式を整えられたと考える方が自然だと思います。

あるいは、例えば般若経典などは数多くのタイプのものが存在しますが、そのことも、内容の統合・整理・再構築という作業が出家集団の中で繰り返されたことや、釈尊が在家者に法を説かれた地域が広範囲にわたっていたことの結果である可能性も大きいと思います。

こうした推論も、他の諸説も、いずれも決定的な根拠があるわけではありません。しかし、そもそもどこにも伝わっていないものが、釈尊滅後数百年経って、いきなり経典として世に出ても、それが釈尊の説法であると広く受け入れられるとは到底考えられません。現実には大乗経典は仏語として広く受け入れられ尊ばれてきました。それは、そこに釈尊が説かれた法の真実があるからこそ成立することであり、後の人の勝手な創作であるとは思えません。

いずれにしても、教えをいただくのは私自身であり、「仏説」ということも、そこに私自身が歩むべき仏道が説かれているかどうかが問題であることはいうまでもありません。

（本願寺派司教　安藤光慈）